

---

# Unlimited World Online

鷹夜 遊樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Unlimited World Online

### 【Nコード】

N6541X

### 【作者名】

鷹夜 遊樹

### 【あらすじ】

神様の手違いで死んでしまった そんなテンプレで、プレイしていたVRMMORPG《Unlimited World Online》の世界に転生することになった主人公。神様から貰ったチート能力や、前世での経験や知識を活かして頑張っていくお話です。

趣味として始めた小説ですので、感想や評価をいただければ嬉しいです。また、設定の矛盾などがあるかもしれませんが、生暖かい目

で見守っていただきたいと思います。そして、悪い点はご指摘いただければ、直してより良い作品にしようと思っております。

一話一話の長さにはムラがあり、10000〜50000文字ですが、それを補えるよう、なるべく早く投稿します。

## 第0話 プロローグ(前書き)

初投稿です。よろしくお願ひします。

## 第0話 プロローグ

前方から轟音と、悲鳴。視線をそちらへ向けると、そこでは俺の仲間達が、巨大な龍の一撃を受け、吹き飛ばされているところだった。

20メートルほど前方にいる、その龍の名は《エンシエント・ドラゴン》。そいつは、このVRMMORPG《Unlimited World Online》で、最強のモンスターと言われている。

しかし、その最強の存在のHPも、何時間も続く戦闘により、残すところあと僅かとなっていた。

ただしそれは、俺や、俺の仲間達にも言えることだった。既にHP、MP回復ポーションも無くなり、HPは残り数ドットとなっている。しかも、彼らはAIではなく人間。HPよりも、精神が疲労し、限界まで磨り減っていた。

あの様子では、俺が勝負を決めるしかないだろう。

スキル発動 《プロミネンス・ジャツジメント》

スキルの発動により、俺の両手の剣が、紅色のライトエフェクトを帯びる。

そこで、俺は龍に向かって駆け出した。

20メートルという距離も、俺のカンストしたAGIの前では無に等しい。

龍の眼前に躍り出した瞬間、俺は双剣スキル《プロミネンス・ジャツジメント》を放った。

まず、右の剣を振り下ろす。すかさず左の剣も振り下ろす。右切り上げ、左切り上げ、右、左、右

俺の双剣が直撃するたび、《エンシエント・ドラゴン》のHPが少しずつ減少していく。

だが、相手も黙ってはいない。俺に対して、プレスや魔術を放つ。俺の残り少ないHPが削れて行く

その時、俺の後方から炎の剣や雷の槍が龍に向かって繰り出された。仲間の魔術師の援護射撃だ。

そして、龍が怯む。そこに、俺は最後の力を振り絞り、攻撃を放つ。

《プロミネンス・ジャッジメント》 計28連撃の最後の1撃が  
龍の身体に吸い込まれ

る直前、俺のアバターが崩壊した

これが俺、《カイ》こと八嶋<sup>やしまた</sup>海斗<sup>かいと</sup>の、この世での最期となった…

…

## 第0話 プロローグ（後書き）

評価や感想、誤字・脱字のご指摘などお待ちしております。

## 第1話 テンプレと選択と（前書き）

はい、テンプレ回です。

途中、《Unlimited World Online》のシステムの設定を説明しています。少し長いので、お許しを。



## 第1話 テンプレと選択と

……………目を覚ますと、そこには見覚えのない空間が広がっていた。

俺の名前は八嶋 海斗。ちょっとオタクな、大学2年生だ。

「ったく、これはなんてテンプレだよ……………」

そう、俺は今の今までVRMMORPG《Unlimited World Online》を《カイ》としてプレイしていたはずだ。しかも、最後はアバターが崩壊するというオマケつきで。

それに、例え強制ログアウトしたのだとしても、俺の部屋はこんな真っ白い空間ではなかった。

VRゲームをプレイする時に被る、ヘルメット型のゲームハード《VRクリエイター》がない、というのも気になる。

「あれ、高かったのに……………」

と、orzの体勢で嘆いていると

「君が八嶋 海斗くんだね」

不意に横から声をかけられた。

そちらを見ると、

ヒゲモジヤのオッサンが立っていた。

「何で美少女じゃねえんだよ!!」

俺は心の底から絶叫した。

オッサンが引いているが気にしない。だって、こういうテンプレ展開だと、美少女（または美幼女）が出てくるのが普通だもん。夢みたっていいじゃない。

「ええと……落ち着いたかな」

しばらくして、オッサンが口を開いた。

「何の用ですかオッs…オジサン」

おっと、興奮したせいかな、口調が荒れてるな。気をつけなければ。

「君に話がある」

「なんですか、なんとなく予想はついていますけど」

俺は苛立ち混じりにそう返した。

原因不明のログアウト、目覚めたら見知らぬ空間、なんとなく偉そ

うなオッサン。これだけ条件が揃っていたら、ねえ？

「なら単刀直入に言うが……………君は死んでしまったのだよ、八嶋海斗くん」

はいはいテンプレ乙。

「……………驚かないのかい？」

「そんなのラノベやゲームでよく使われるネタですよ。……………自分がそのイベントに遭遇するとは、思わなかったけど」

もはや驚きが一周回って、冷静になってしまった。

「それなら、私が神様だと言っても、驚かないのだろうね」

「まあ」

だってテンプレだし。

「それなら……………君の死因がちょっとした手違いだ、と言っても？」

チヨットマテ。イマコイツナンツッタ？

「おい、それも予想のギリギリ範疇だが、聞き捨てならないな。詳しく教える」

「いや実はねえ、あの時に死ぬはずだったのは、君ではなく君の『飼い猫』だったんだよ」

俺の飼い猫……《みーちゃん》（ ）。俺が幼い頃からずっと一緒にいて、名前の由来は某青タヌキの……

「まあ、それはわかりました。でもなんで俺が死んだんですか」

「それはだね、私のかわいい娘が………」

「ねー、おとーさん。わたしもおとーさんのおしごとおてつだいしたいな」

「なんていい子なんだ！よしわかった、お手伝いさせてあげよう！」

「ありがとーおとーさん！」

「うへへ、いいんだよ……。それじゃあ、あの猫ちゃんはもう寿命だから、天国に連れて行ってあげよう」

「うんわかった！えい！」

「ちよ、そっちの寝てる人じゃなくて……。あ」

「……………と、いうわけなんだよ」

「よくわかった、死ね」

なんだこいつ、ただの親バカじゃねえか。

「その娘とやらは何歳だ」

「5歳」

「お前バカだろ！？なんでそんな重要なこと5歳の幼女にやらせんだよ！！」

「だって…………可愛かったから？」

ダメだこいつ早くなんとか（ry。しかも何故に疑問形。

「まあ、手違いだったのは許しましょう。俺も、幼女に対して怒鳴るほど、鬼じゃないですから」

むしろ幼女は好k…………おっと危ない。

「じゃあ、さっさと俺を生き返らせてください。神様ならできるとしょ」

「ムリ」

「……………は？」

「実はな、人を死亡させることはできるんだが、生き返らせるのはできないのだよ」

え、どうということなの？意味がわからないよ。

「だってほら、もし生き返って、私のことを世間に吹聴されたら、ねえ？」

ねえ？じゃねえよ。そもそも誰も信じねえよ。

「じゃあ、俺はどうなるんですか」

「話というのは、その事についてなんだよ」

「簡潔にお願いします」

「君が選べるのは2つ、このまま成仏して来世に転生するか、君の望む世界に転生するか」

「その2つの違いは？」

「成仏ルートだと、君の記憶などをすべてをリセットして転生してもらおう。ついでに、少しくらいなら、俗にいう《チート能力》もつけてあげよう」

異世界ルートは、君の記憶を保ったまま、転生してもらおう。ついでに、少しくらいなら、俗にいう《チート能力》もつけてあげよう

じゃないか。何、これはお詫びと考えてくれればいい」

ルートって……。まあ、ここは異世界ルートだろう。普通に転生したら勿体ないし、何より楽しそうだからな。

「俺が望む世界か……。なら、《Unlimited World Online》でもいいんですか？」

「もちろん。ただし、完全に一致、というわけではないがな」

「どづいつことですか？」

「1つ例をあげるが、君以外の人間がNPCだったらどうなる？」

俺以外がNPC、か。こんな感じだろうか……………

俺「おはようございます。今日もいい天気ですね」

NPC「ギルドへの道？それなら」

俺「いや、ちょ、あの、もしもし。中央広場にはどうやって」

NPC「ギルドへの道？」ry

《以下無限ループ》

これはひどい。きつと両親もそうなるんだろう。

「なるほど、よくわかりました。じゃあ《チート能力》っていうのは？」

「簡単なことだ。その世界に悪影響を及ぼさない範囲でなら、どんな能力でも与えてやるう」

そういうことか。まずは、《Unlimited World Online》について、思い出してみるか

## 《Unlimited World Online》

レベルとスキル併用制のVRMMORPG。中世ヨーロッパ風の世界が舞台となっている。その特徴は、スキルの異常なまでの豊富さにある。《武器》《魔術》《技能》スキルが数えきれないほどある。

《武器》や《魔術》のスキルはまだ常識的だ。《片手剣》や《火属性・攻撃魔術》といった感じた。ただし、その数は尋常ではないが。

だが、群を抜いて異常なのは《技能》スキルだ。これには《鍛冶》や《調合》などの生産系や、《索敵》や《隠蔽》などといった戦闘補助系のスキルが含まれている。

しかし、何を思ったのか運営は、《テーブルマナー》や《ギター演奏》などといった、意味不明な《技能》スキルを作成した。それらはネタスキルと呼ばれている。



しかし、豊富なスキルに対し、スキルスロットは10個しかないため、ほとんどのプレイヤーは、ネタスキルは使用していない。

なかには、ネタスキルを使っているうちに、現実世界で『テーブルマナーがよくなった』や『ギターの演奏が上手になった』という報告があるようだが……

閑話休題。

そのため、スキルの組み合わせが無限にあることが、《Unlimited World Online》というゲームの題名に關係している。

また、他の特徴に、《中ボス以上の敵の強さが、こちらの戦力に合わせて変動する》というものがある。

これにより、小規模のギルドやパーティーでも、難易度は別として、最高レベルのボスを討伐できるようになった。

反対に、大規模のレイドを組んでいくと、その強さは跳ね上がる。

この調整が上手くできていて、バランスを保っている。

もちろん、その変動の最低ラインはある。これは、低レベルプレイヤーに、最高レベルのボスを倒させないようにするためだ。

もっとも、低レベルプレイヤーは、ボスにたどり着く前にMobに

やられてしまうが。

しかし、『ソロプレイヤーが、パーティー向けのボスを討伐した』という事例もある。ただ、こいつは《Unlimited World Online》で、1、2を争うプレイヤーだったので、他のプレイヤーが同じことをするのは、自分からデスペナルティを貰いに行くようなものだ。

そして、《武器》スキルか《魔術》スキルのどちらを使うか、それを大きく決定するのが、《戦士》と《魔術士》のジヨブだ。

これには、《一次職》《二次職》といったものはないが、スキルの選択に大いに関係する。

《戦士》ならば、《武器》スキルはほぼすべて選択できるが、《魔術》スキルは最低レベルの効果を持つものしか、選択できない。

《魔術士》ならば、《魔術》スキルはほぼすべて選択できるが、《武器》スキルは《杖》や《短剣》といったものしか、選択できない。

また、ステータスは《STR》《INT》《AGI》《DEX》《DEF》《VIT》の6つ存在し、順に、武器攻撃力、魔術系能力、速度、命中率、防御力、HP、などに影響し、それぞれ最高1000ポイント、1レベルごとに30ポイントを割り振れるようになっている。HP・MPは、1レベルごとに100上がり、HPは《VIT》、MPは《INT》が1増加するたびに、5ずつ増加する。

というのが、《Unlimited World Online》の大きな特徴だ。

「それじゃあ、俺の考えた《チート能力》を発表します」  
「どうですか」

- 1、《戦士》《魔術士》の2職両立
- 2、《スキル合成》能力
- 3、スキルスロット増加（10 20）
- 4、レベルアップごとに加算される、ステータスポイントの増加（30 45）

「どう感じます」

「君は謙虚だな。私はもつと多く、すさまじい内容の注文がくると思っていた。たとえば、経験値100倍とか、ステータスマックスとか」

「これでも十分チートでしょう」

全部、かなりの効果がありそうだし。まあ、ゲームバランスが崩壊しないようには気をつけて選んだつもりだ。

ステータスポイントUPは、《戦士》《魔術士》の両立のためには仕方ないだろう。それでも、全部のステータスがカンストしないようにはしたがな。だって、あまりに完璧すぎるとつまらないし、パーティープレイの楽しみが減ってしまう。

「ところで、《スキル合成》とはなんだ？」

「ああ、それですか？簡単に言えば、剣技と魔術の合体って面白そうじゃないですか」

「なるほど」

……まあ、それ以外の理由があるがな。

「では、そろそろ転生をはじめろ。後悔しないな？」

「大丈夫だ、問題ない。と言いたいところですけど、俺の家族はど

「うなるんですか？」

「それについては心配するな。私が丁度いい具合に、残された君の家族に幸福を与えておいてあげよう。それとも、君が存在したことを、全ての記憶・記録から完全に消してあげようか？」

「いや、俺の家族を幸せにしてやってください」

存在したことが忘れ去られるなんて、俺の20年の人生はなんだったんだ、ってなってしまうからな。

「それでは始める。『開け、異世界への扉』」

次の瞬間、俺の目の前に、神々しい雰囲気をもった扉が現れた。

「それじゃあ、いってきます」

「ああ、行ってこい」

そして俺は扉を開き、光の中へと歩き出した

……神様の娘（幼女）、見せてもらえばよかった。

## 第1話 テンプレと選択と（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

評価・感想・誤字脱字の指摘などお待ちしております。

## 第2話 転生完了！対面（前書き）

さて、ついに？異世界でのお話です。



## 第2話 転生完了ご対面

目を覚ますと、俺は赤ん坊になっていた。

ああ、転生したんだなあ、と感慨にふけっていると、気付いたことが一つ。

……やばい、腹減った。どうしよう。

声を出そうとしても何故か出ないし、体もろくに動かせない。

……あれ？ 詰んだ？

と思っていたら、何か変な感じが

「オギヤァー！」

声が出た。ただし泣き声。

うわぁ、自分のことながらどこからこんな声が出るんだろう。こんなに叫んだのは、前世でもほとんどなかったぞ。

すると、パタパタという音と共に誰かがやってきた。

「大丈夫？どうしたのかなー？」

と、綺麗な女性が俺に話しかけてきた。しかも日本語で。どうやら、言葉には困らなさそうだな。

その女性は、美しく輝く黒髪を肩まで伸ばし、肌は白く、とても整った顔の造形をしていた。特徴的なのは、その瞳だろう。燃えるような紅色の瞳だ。

たぶん、この女性が俺の母親だろうな。髪は黒なのに、瞳は綺麗な紅色だな。などと思っていると、

「わかった、お腹が空いたのね。ちょっと待っててね」

というと、俺を持ち上げた。

そこで、俺は重大な事実気がついた。

(赤ん坊の俺 + ご飯) × 母親 = 導かれる解といえは……………

……………ふう。このことは詳しく追及しないでくれ。

ただいえるとすれば、サイコウでした。

お腹がいっぱいになると、すぐに睡魔が襲ってきた。なんて不都合な体だ、と思っていると、だんだんと意識が

次に目を覚ましたときには、ガタイのいいイケメンが俺の目の前に、そのイケメンは、俺が目を向けると、

「母さん、この子と目が合ったぞ!..!」

……何だよ『目が合った』って。異様なまでにニコニコと、むしろニヤニヤと笑っているし。おい、イケメンが台無しだぞ。

「パパだぞ、わかるか?」

この人が俺の父親か。つまりは親バカなんだな。

父親は、まさに異世界、という風貌をしていた。金髪に金色の瞳、整った顔立ちで、瞳には強い光が輝いていた。

この父親と母親なら、さぞかし俺も整った顔になっているんだろう。成長して鏡を見る日が待ち遠しいな。

周りに目を向けてみると、結構立派な家だった。《Unlimited World Online》は、中世ヨーロッパ風の世界が舞台だったが、俺が転生したこの世界もそれにならったもののようにだ。

そこそこ金持ちの家に生まれたようだが、両親の職業が気になるな。ただの農民や市民、ということは無いだろうし、一体何の仕事をしているんだ？

「さーで、カイ。パパと何して遊ぼうか？」

おい、赤ん坊が遊べるわけないだろう。

それにしても、俺の名前は《カイ》か。《Unlimited World Online》でのプレイヤーネームと同じだな。何かよくわからない名前にされるよりは断然いいな。前世でのあだ名も《カイ》だったから、呼ばれ慣れてるし。

……つと、なんか頭が痛くなってきたな。赤ん坊の頭なのに、いろいろと考えすぎたせいかな。

「オギャー！ オギャー！」

「ああ、泣き出してしまった。母さん、どうしよう！」

「落ち着いて、あなた。みっともないわ。……カイくん、どうしたの？」

まあ、楽しい第2の人生になりそうだ。

## 第2話 転生完了ご対面（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

評価・感想・誤字脱字の指摘などお待ちしております。

### 第3話 現状把握（前書き）

どうも、今回は世界観の説明です。短いですがお許しを。

### 第3話 現状把握

やあ、ぼくのなまえはかい・ふおるていす！とつてもげんきなさん  
しゃいじだよ！

え、ム力つく？まあ許してくれ。3歳児だからな。といつても、精  
神年齢は23歳だかな。

なんだかんだで、カイ・フォルティスとして転生して3年がたった。

3歳児という武器（無垢な笑みや上目遣い）を生かし、両親からさ  
まざまなことを聞き出し、この世界の知識を得た。

まず、俺が転生したのは《Unlimited World On  
line》の舞台、ヴィリアという世界。

そして、俺が今いる場所は、ベルム大陸にある3つの国の1つ、レ  
イヴィニア王国の首都レイヴンだ。

大陸の3国、レイヴィニア王国・シルヴィニア王国・エルヴィニア  
王国は、もともとアルカヴィニア王国という1つの国だったが、海

を隔てたところにあるという大陸から来たモンスターの侵攻により、王が死に、王国が滅んだので、王の3人の子が3つの国を作り、協力して今まで平和を保ってきたらしい。

そのため、今でも戦争もなく（俺としてはありがたい）、モンスターに対抗するため条約を結び、協力しているようだ。

そして、大陸中央部には、滅びたアルカヴィニア王国の首都アルグインを根城として、様々な高レベルモンスターがいるようだ。

そこでモンスターどもを支配しているのが《エンシエント・ドラゴン》。そう、前世で俺が倒し損ねた、クッソ忌々しい蛇野郎だ。

この話を聞いたとき、俺のこの世での目標が決定した。

《エンシエント・ドラゴン》を今度こそこの手で倒す

何年かかるかわからないが、きっと成し遂げて見せる！

閑話休題。

大陸にいる種族は、《ヒューマン》《エルフ》《ドワーフ》《ケットシー》の4種族。特に種族間の争いはない。

その数は

ヒューマン >> 越えられない壁 >> エルフ ≧ ドワーフ ≧ ケットシー



となっているようだ。

ヒューマンは普通の人間だが、エルフは魔術、ドワーフは鍛冶、ケットシーは身体能力に長けているようだ。

俺の興味をひいたのは、ケットシーだ。ケットシーは別名《猫人族》。  
つまり、

ネコミミミ!!!

目にする日が待ち遠しいぜ……。

さて、この世界の説明は、ここまでにしよう。

次は俺の両親についてだ。

父さんはアラン・フォルティス、母さんはミア・フォルティス。職業は《冒険者》らしい。んで、父さんは戦士、母さんは魔術師だとき。詳しいことは教えてもらえなかった。俺がもっと大きくなっ

たら教えてくれるらしいが。

ただ、わかったことが1つ。

《母さんは怒るとヤバい》ということだ。

以前、この2人が喧嘩したとき、母さんが父さんを連れて庭へ出た。

その後、爆音。戻って来た父さんは泥だらけ、母さんは妙にツヤツヤした顔をしていた。

俺？俺はその時、ベッドにこもってガタガタ震えていたよ。

母さんだけは怒らせないと誓った瞬間だ。

後は、スキルについてだが、まだ使えなかった。

父さん曰く、

「5歳になるときに、《戦士》《魔術士》の適正を調べるんだ。そのあと、スキルが使えるようになる。」

ということだ。

どうやらこの世界では、先天的に適正が決まっているらしい。まあ、俺は結果を知っているがな。

ステータスは、こんな感じだ。

名前：カイ・フォルティス

適正：

レベル：1

ステータス：

HP	135	(100+35)	MP	140	(100+40)
STR	8	INT	8	AGI	8
DEX	7	DEF	7		
VIT	7				

装備：

武器

なし

防具

頭 なし 腕 なし 胴 ただの服 腰 ただの服 足 ただの靴

アクセサリー なし

となっていた。

適正は、5歳になったら表示されるんだろう。

ステータスポイントは初めてステータスウィンドウを開いた時に振っておいた。しっかりポイントは45あった。神様のチートだな。ありがたい。

それにしても、装備《ただの服》って……。

さて、そろそろ寝るかな。子どもには睡眠が必要なんです。

それじゃあおやすみ〜。

### 第3話 現状把握（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想、評価、誤字脱字などのご指摘お待ちしております。

#### 第4話 マイブーム(前書き)

すいません。間を持たせる& a m p・今後に整合性を持たせるために、短いながらも投稿します。

急ピッチで仕上げたため、あれ?と思うことがあるかもしれませんが、ご指摘いただければちゃちゃっと直します。

## 第4話 マイブーム

4歳になりました、カイ・フォルティスです。

最近では、運動と読書がマイブームです。え、4歳児がすることじゃない？はっはっは。もちろん理由があるのさ。

実はこの前、ステータスウィンドウを開いてみると、気付いたことがあったんだ。それは

モンスターを狩っていないのに、経験値が溜まっている

と言っことだ。

これには流石の俺も驚いた。経験値稼ぎをした覚えが全くなかったからな。

神様、何かしやがったのか？とか思いつつ、父さんに聞いてみると、経験値が溜まる仕組みがあるらしい。それは

- ・成長と共に、経験値は自動的に溜まっていく。
- ・運動や読書などをするたび、それに伴い増加する。

ただしこれによって得られる経験値はごく微量、かつ成長に伴う経験値は、15歳までしか得られない。

ということだ。

どうやら、前世の現実で《成長すると力がつく》といったことや、《読書をするとか知識を得られる》ということが、この世界では経験値に換算され、自分の好きなように能力を上げられるようだ。

しかし、気になったことが一つ。

あれ、これじゃあ読書をして、力が付くんじゃ？

想像してみてくださいよ、例えば

家に引きこもって勉強ばかりしている奴が、いつの間にか怪力になっているのを

当然、このことについても聞いてみた。すると、父さん曰く、

「確かにそういうことも出来るが、そればかりする人はなかなかいないな。戦士ならば、基本は戦闘訓練をしているから、勉強だけをすることもなく、魔術関連の能力を上げる必要はないし、魔術師だ



って、たとえ引きこもっても、最低限の力があれば事足りるから、わざわざ力をあげていく必要もないからね」

だとさ。

まあそりゃあそうだよな。戦士が引きこもったり、魔術師がムキムキになる意味がないしな。

おっと、話がそれてきたな。閑話休題。

というわけで、最近のマイブームが運動と読書になったんだ。そのおかげで、レベルが2上がった。ステータスは、

名前：カイ・フォルティス

適正：

レベル：3

ステータス：

HP	425	(300+125)	MP	400	(300+100)
STR	25	INT	20	AGI	25
DEX	20	DE	20	DE	20
F	20	VIT	25		

装備：

武器

なし

防具

頭 なし 腕 なし 胴 ただの服 腰 ただの服 足 ただの靴  
アクセサリー なし

といつぷつにした。

とりあえずは、武器戦闘メインでやっていくつもりなので、  
R《《AGI》》《《VIT》》に多めに振っておいた。  
《《ST

おや、そろそろランニングに行く時間だな。

今のうちに来るだけ経験値を溜めておかなければな。じゃ、行っ  
てくる。

それでは。

## 第4話 マイブーム（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

よろしければ評価・感想・誤字脱字のご指摘などをお願いいたします。

次はカイのスキルと得物についての説明です（多分……

## 第5話 俺と前世とスキルと得物（前書き）

予告通り、武器とスキルについての説明回です。

ちよつとくどいかな？でも、今後のため必要だったんや……。

## 第5話 俺と前世とスキルと得物

もうーはーんーとーしーでー

スキル解放だアアア!!!

と言っわけで、最近では前世での《Unlimited World Online》のプレイについて思い出して、まとめている。

では、そのレポートの一部、特に武器とスキルについてをご覧頂こう

俺が前世で使っていた武器は《双剣》だ。双剣は全武器&amp;スキルの中でも、最高レベルの手数と攻撃力を誇っている。

例えば、双剣スキル《プロミネンス・ジャッジメント》。計28連撃。

片手剣スキルのなかで最高HIT数を誇る《ライジング・スパーク

《10連撃と比べれば、その圧倒的な手数がわかるだろ？

しかし、その性能に対し、使用者はほとんどいない。なぜならば

《VR世界でスキルに頼らず両手の剣を自在に操る》ことがとんでもなく難しいからだ。

その難しさは、《Unlimited World Online》の掲示板で

- ・性能もおかしいが、その操作難易度もおかしい。
- ・こんな武器を使うより、堅実に片手剣を使ったほうがはるかに効率的だろ。

- ・こんな武器を使えるか！ 俺はもう換える（武器を）！！

などという意見が溢れかえるほどだ。

だが、俺は長年のプレイで双剣の扱いをモノにした。その後はもう笑いが止まりませんでしたよ、ええ。

そこらへんに転がるMOBどもを、ちぎっては投げ、ちぎっては投げ

中ボス程度なら一人でも討伐できるようになり

いつの間にか、トッププレイヤーの仲間入りを果たしていた。

そんな俺でも、双剣スキルを極めることは出来なかった。

スキルは、使うたびに《熟練度》が上がっていき、最高1000まで溜まる。

双剣は、この熟練度の上がり方が異様に遅い。他のスキルの1/2のスピードだ。

これも、双剣の使い手が少ないことの原因の1つだ。

《Unlimited World Online》の中で、1、2を争う双剣の使い手だった俺でさえ、熟練度を900ちよいまでしか上げられなかった。《プロミネンス・ジャツジメント》は900の大台に乗ったとき、解放されたスキルだ。つまり、

《プロミネンス・ジャツジメント》を超えるスキルがまだ存在している

ということだ。

このことについて前世では、

「運営は何を考えているんだ……………」

「なんつー壊れスキルwww ワロスwww」

「そんなスキルで大丈夫か？」

などと言われていた。

というわけで、この世界での目標2つめ

《双剣スキルのマスター》

が出来た。

俺は中学生→大学2年の8年間プレイしていたがマスターできなかったので、おそらくかなりの時間がかかるだろう。

しかし、今でも双剣の使い方は体に染み付いているし、無謀な挑戦ではない、と思う。

さて、次は各種スキルについてだ。

俺が前世で使っていたのは、

《双剣》 《片手剣》 《格闘術》 《投剣》 《武器防御》 《属性付加》



《隠蔽》 《搜索》 《自動回復》 《調合》

の10個だ。

では、それぞれについて説明しようか。

《双剣》 スキルはさっき説明した通り、俺がメインで使う武器攻撃スキルだ。

《片手剣》 《格闘術》 スキルがなぜあるか、だって？それはな、《双剣》 スキルは手数が多い分、武器の消耗も早いんだ。

だから、武器が壊れたときのことも考えて、《片手剣》 《体術》 スキルを選択したんだ。

それに片手剣だけでも、普段の狩りには事足りるし、格闘術は、鏢迫り合いになった時などに威力を発揮する。

《投剣》 スキルは、中々遠距離の攻撃手段を手に入れるため選んだ。

《武器防御》 スキルは、盾を持つことの出来ない双剣で、防御をするためのものだ。

ただし、これを使うと武器の耐久力がどんどん減っていくので、自重してはいるが。

《属性付加》スキル。これは武器に属性を付加する。

武器上位スキルの中には属性をもつものもあるが、その効果はごく低い。しかし、このスキルは、それを遥かに上回る効果を発揮する。エレメント系などのモンスターには属性を持った魔術や攻撃しか効かないため、戦士には厄介な敵だが、このスキルで簡単に殲滅できるようになる。

《隠蔽》 《搜索》 はかなりメジャーなスキルだ。

《隠蔽》（ハイディング）スキルは、一定範囲に近づかれるまで、モンスターに気付かれなくなる。熟練度が上がっていくにつれ、モンスターに接近できる距離が近くなり、最終的には、俺はザコモBの隣で踊ったりもしていた。

《搜索》（サーチ）スキルは、その名の通り、一定範囲を搜索するスキル。マップの中に、モンスターやプレイヤー、トラップなどが表示される。

《自動回復》（オートリバース）スキルは、一定時間ごとにHPを回復する。

最初はその回復量は微々たるものだが、マスターすると、10秒間に500回復（HPは最高で15000だ）するという壊れ性能に化ける。

ただし、その熟練度を上げる方法は、《HPが1割以下の状態で長

時間戦闘』するといい鬼畜極まりないものだが。これのせいで何度デスペナルティを食らったか……………。

《調合》スキル。その名の通り、各種ポーションなどの調合をする。

ポーションには、攻撃速度増加や防御力増加など、戦士には欠かさないものもあるが、あつという間に尽きてしまう。

そこで、自分でも調合できるようにしているわけだ。

というのが、俺の前世でのスキルだ。

完全攻撃特化のスキル構成だから、ダメージディーラーとしているんなパーティーからひっぱりだこだったぜ。

以上が、俺のまとめた、武器とスキルについてのレポートだ。

あー、読み直していたら、ますますスキルを使いたくなってきた…。

早く半年たたないかな。

## 第5話 俺と前世とスキルと得物（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

はい、次はようやくカイくんが5歳の誕生日を迎え、適正検査をするお話です。

大体書き終えているので、明日の朝か、午後4〜6時に投稿しようと思っています。

自分でもビックリするぐらい筆が進む進む（笑）

ストックは一応あるので、まだ大丈夫……だと思いたい。

評価・感想・ご指摘など絶賛お待ちしております！

ではまた明日。

## 第6話 適正検査（前書き）

投稿3日でPV14000弱、ユニーク2500弱になりました。  
自分でもビックリです。ありがとうございます。

さて、ようちやく適性検査です。

## 第6話 適正検査

どうも、カイ・フォルティスです。今日は俺の5歳の誕生日だ。つまり、

### 《適正検査＋スキル解放》

やっと、やっとだ。ついにこの時が来た！

今までは、体を動かしたり、本を読んで（両親が日本語を使っていたので、薄々勘づいていたが、やっぱり文字も日本語だった。ちなみに、両親は驚愕し、俺のことを天才だの何だのと言っていた）知識を得ていたが、せっかく《Unlimited World Online》の世界に転生したんだから、早くスキルを使いたくてウズウズしていたんだ。

さて、父さんと母さんが呼んでいるからそろそろ行くか。

で、両親に連れられてきたのは神殿だった。《Unlimited World Online》がゲームだった時は、よくココのお世話になったな。

え、何でって？それは簡単。

ここ、HPが0になった時の復活場所だから。

多分、この世界でもその設定は生きていて、HPがなくなるとここで復活するんだろう。ただ、極力死ぬのは避けたいがな。ゲームでも、死ぬと嫌な気分になったし、何より今は現実だ。死んだときのことなんて考えたくもない。

つと、今回の目的は適正検査だ、さっさと済ませてしまおう。

そして受付を済ませ、ある部屋に通される。うわー、ソファーがふかふかだー。

すると、神官さんが水晶玉らしきものを持ってきた。

「では、この玉に血を一滴垂らしてください」

え、血？痛いのは嫌なんだけど、仕方ないか。

俺は渡された針で指を刺し、血を一滴垂らした。

すると、水晶玉が輝きだした。

さて、結果はどうなるかな。というよりも、父さんや母さん、神官さんの反応が気になるな。

結果……………

適正：戦士・魔術師

まあ、予定通りだな。ありがとう神様。素晴らしやチート。

さて、周囲の反応は

みんな目を見開き、口をポカーンとあけて、驚愕していた。

あっはっはっはっは！ ワロス！！ 気分がいいねえ！！！！

俺は『どうしたの、みんな？』みたいな顔をしながら、内心では大笑いしていた。

55

1番早く気を取り直したのは父さんだった。

「あの……神官さん、こんなことって……」

そして母さんと神官さんも我に返る。

「ど、どうなんですか神官さん？」

「こんなことは初めてです……。私には判断が出来ないので、この神殿の最高責任者を呼んできます」



そういつと、神官さんは猛ダッシュで部屋を出て行った。

数分後、神官さんが立派な老人を連れて戻ってきた。神官さんが落ち込んでいるのを見るに、「神殿内を走るな！」とかつて怒られたんだろうな。

ちなみに、その老人は柔和な顔をしているが、目には鋭い光が宿っている。そして、頭は水晶玉と同じくらい輝いている。あー、さわってみてー。

老人が口を開く。

「初めまして、フォルティス家の皆さん。  
私はこの神殿で大司教を務めている、アルベルト＝メルスと申します。」

おお、大司教。これは凄い人が出てきたもんだ。それにしても、何で俺の家の姓を知っているんだ？

「初めまして、メルスさん。早速ですが、これはどういふことでしょうか？」

父さんが水晶玉を指差しながら尋ねる。

「ふむ、こんなことは初めてですな。過去にこのような結果が出たことは一度もありません。」

そりゃあそつだよな、チートだもん。

「では、この子はどちらの適正があるんですか？」

母さんが心配そうに尋ねる。まあ、普通はそう思つよな。

「そつですな……………カイくん、だったかな？」

「はい」

なんかこつちに話を振ってきたぞ。

「適正検査を終えたのだから、スキルをもつ使えるだろう。確認してみなさい」

なるほど、この大司教さまはそうやって調べるのか。なかなか頭が回るようだ。

俺はステータスウィンドウを開く。すると、前は選択できなかったスキルの欄が選択できるようになっていた。開いてみると

「どつだ？」

父さんが聞いてくる。

「うんつとねー、全部のスキルが使えるよ？」

「……………な、なんだつてー!?」「……………」

父さん、母さん、大司教、神官さんの大合唱。

いや、驚きたいのは俺の方なんだが……。だって、《武器》  
《魔術》《技能》スキルの中に

ネタスキルがこれでもかと言うほど存在しているんだから

これはスキルの選別が大変だぞ……。戦士系スキルは前世の記憶があるから、それを選べばいい。だが、魔術士系スキルは全くわからない。これからは地道にスキルを選別する毎日になりそうだし……。

おや、《武器》《魔術》《技能》スキル欄の他に、もう一つタブがあるぞ

《エクストラ》スキル：スキル合成

おお……。こんなところにチートその3が……。これはまだ黙っておこう。もつとカオスな状況になってしまうからな。

それに、スキルスロットも20個あるし……。

そんなことを考えていると、父さんが口を開く。

「両方の適正があるのには驚きましたが、どうしてそうなったんでしょう?」

すると、大司教はこう返した。

「おそらく……ですがな、アラン殿とミアア殿は高名な戦士と魔術師ですから」

え、そうなの? そんなの初めて聞いたわ。だから大司教はウチの姓を知っていたのか。あとでしっかり聞いておこう。

「そんなお二人の息子であるカイ君に、二人の才能が受け継がれたのでは?」

違います。チートです。

「なるほど」

……ごめん父さん、母さん。それ間違ってるから……。

「まあ、一応納得しました。ところで、このことは……」

「ここにいる我々だけの秘密にしておくべきでしょう。それでも、いずれは明るみにでるでしょうがな」

俺としては、別にそんなことどうでもいいがな。他にも《エクストラ》スキルとかがあるんだから。

「では、表向きには戦士の適正がある、と言いつつに」

「いいえ、魔術師よ」

こんなところで父さんと母さんの喧嘩が勃発。そして俺の脳裏をよぎるのは、爆音と母の

「ちよ、ちよっと父さん、母さん。喧嘩はやめてよ」

俺が上目遣い& a m p ;涙目でそういつつ、

「そ、そうだな。ここはカイに決めさせるべきだろう。なあ、母さん?」

「そ、そうね、あなた」

こうかはばつぐんだ!

さて、どうするか。前世での経験もあるし、ここは

「うーん、そうだなー、じゃあ戦士で」

俺がそういつつ、父さんは笑顔になり、母さんは暗いオーラをまとい始めた。しかもなんかブツブツ呟いてるし……。

や、やばい。選択肢を間違えたか?これは死亡フラグが立った気がする!フラグを折らねば!!

「で、でもね、僕は父さんから剣術を、母さんからは魔術を習いた

いと思ってるんだけどなー、あっはっは……」

次の瞬間、母さんが物凄い勢いで顔を上げ、ひまわりが咲いたような笑顔になった。

「そうなの？ やー、カイくんはいい子だねー」

よ、よかった。フラグ処理できたか……。寿命が縮んだわ。

どうやら父さんや、関係のない大司教たちも同じことを考えていたようで、皆ホッとした顔をしている。父さんにいたっては、こっちに向かってサムズアップしてきている。

「では、カイの適正は戦士、ということだ」

「わかりました」

ということだ、俺の表向きの適正は戦士、ということになった。

俺としては、んなこたあどーでもいいから、早くスキルを使いたいたいんだが……。

「それでは、私たちはこれで。本日はお手をかけました」

と行って、父さんが立ち上がり礼をした。

大司教は、

「いやいや、久しぶりに面白いものを見させていただきました。神のご加護があらんことを」

と行って、俺の頭をなでてきた。てっきり何か恩恵があるのかと思いきや、何も無い。期待させんなよ。

そして、我が家に帰ってきた。

よっしゃー！スキル使うぜー！！

「父さーん、スキル使いたいから相手してー！！」

「よしわかった、やろっじゃないか！」

しかし

「待ちなさい」

母さんが止めてきた。しかも目が据わっているような……。

「先にカイくんが使うのは魔術よ」

「カイが俺に相手を頼んでいるんだから、剣術だろっ」

「いいえ、魔術よ」

なんだろう、デジャヴ？

「いいわ、ちょっと庭に来て」

「つつ！いや、落ち着け母さ」来なさい』はい……」

父さんが引きずられていく。俺は心の中で父さんに合掌した。

まあ、スキルを使うのは明日でもいいかな、うん。今日はゆっくりしよう。

夕日が街を照らすなか、父さんの叫びが響き渡った



## 第6話 適正検査（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想・評価・ご指摘をいただけたら嬉しいです。

また、今後について？を活動報告に掲載しました。

次もスキルは使わない……かな？執筆中ですのでそこは掲載してからの楽しみ、ということまで。

## 第7話 両親は……（前書き）

結局スキルは次回に持ち越しです。

サブタイトル通り、両親についてです。今回は難産でした。しかも、中2病だし。

## 第7話 両親は……

はい、現場のカイ・フォルティスです。今日は、私の誕生日の翌日です。ただいま私は、尋問の現場に立ち会わせています。

『誰が、誰に、何について』尋問しているか、ですって？それは

『俺』が『両親』に『両親の正体』について聞いているのだ。

「それじゃあ、そろそろ父さんと母さんについて教えてくれる？」

そう、俺は両親のことをよく知らない。知っていることといえば、職業：冒険者 ということと、かなりの実力者であるということ、父さんは母さんに尻にしかれている、ということぐらいだ。

「よしわかった。話そう」

父さんがそういった。

「父さんと母さんが冒険者だ、ということは前に話したな」

「うん」

「父さんと母さんは冒険者の中でも、Sランクの冒険者なんだ」

Sランク、ギルドランクとは、冒険者ギルドが設定している大まかな強さの目安だ。

ランクは上から順に、

S S > S > A > B > C > D

となっている。

C、Dランクの冒険者は掃いて捨てるほどいる。このランクにいるのは、冒険者に成り立ての人が、生活費などの足しにするために、依頼を受けている人たちだ。

C、Dランクの依頼は、薬草などの収集や、低レベルのモンスターの討伐がメインとなっている。

その実力はまだまだ、といったところだ。

Bランクの冒険者は、冒険者として飯を食っている人たちだ。そのため、命の危険はあるが、そのぶん収入は多い。

その依頼の内容は、中レベルモンスターの討伐、モンスターが生息する場所での素材の収集、商人たちの護衛、などだ。

ある程度の力量を持っていなければ、このランクに上がることはで

きない。最低でもレベルが30は必要だ。ただし、戦闘技能が高ければその限りではない。

Aランクにもなれば、その冒険者の数は激減する。

何せ、Aランクの依頼では、みんな大好き《ドラゴン》などの、高レベルモンスターが出てくるのだ。その難易度はBランクとは比べ物にならない。

そのぶん、見返りも大きい。莫大な収入を得ることが出来るし、名声も得られる。

《2つ名》なんて中2くさいものを持っている人もいる。

その力は、パーティーで挑めば、最低レベルのドラゴンならばフルボッコできるらしい。

といっても、Bランクの平均的なパーティーだと、その最弱ドラゴンに良くて同等、最悪壊滅、という結果になるが。しかも、ゲーム時代の設定が生きているので、強さの変動ありで、だ。いかにAランクの冒険者が人間離れしているかがよくわかるだろ？ちなみにレベルは60以上だ。

そしてSランク。このランクの冒険者は最早人間を卒業している。

その強さは、戦士ならば例の最弱ドラゴンを1人で、短時間に、かつ余裕で肉塊に、魔術士ならば、魔術1発で半径1キロを焦土化で

きるらしい。

その数は、大陸3国の1国ごとに約10人しかいない。

もちろん、Sランクの依頼は鬼畜級だ。

大都市を壊滅にまで追い込んだ化け物の討伐や、人外魔境にある、国宝にも匹敵する物の収集など、普通の人間が挑んだら2秒でお陀仏するような依頼しかない。

Sランクになれるのは、Aランク、かつその中でも戦闘能力が高い人間のみだ。

最高のSSランクは、伝説の存在だ。

かつて、我が宿敵であり、最強の《エンシエント・ドラゴン》を半殺しまで追い込んだパーティーがあった。その結果、その蛇野郎は戦闘不能（といっても、Sランク冒険者でも敵わない）になり、回復するまで、アルヴィンの根城で引きこもり生活を永遠と営むことになった。

その後、そのパーティーの8人は、英雄として、特別にSSランクのランクが与えられた。また、その全員がレベルは90台だったという。

そして、今に至るまで、この8人以外にSSランクとなった者はいない。

というのが、この世界でのギルドランクだ。

まさか両親がSランクだったとは……。そりゃ有名にもなるわな。

俺のことをいつもニコニコ眺めている両親が、戦略兵器級の實力者だとは……。人は見た目によらないな。

っていうか、ラッキーじゃね？Sランクの冒険者から戦いの指導を受けられるとか。これは、これから先、期待できそうだ。

「ところで、父さんと母さんには《2つ名》があるの？」

「ああ、もちろん。父さんは《獅子双剣》や《双剣の死神》、果ては《肉塊生産工場》なんてのもあるぞ」

父さんは笑いながらそう言った。

なんて中2くさい2つ名なんだ……。《獅子双剣》《双剣の死神》はまだしも、なんだ《肉塊生産工場》って。笑いながら、しかも5歳児に言うことじゃねえだろ。

あ、でも2つ名から判断すると、父さんは双剣使いか。これは都合がいい。この世界での双剣を使った戦闘のノウハウを教えてもらえるからな。

そんなことを考えていると、今度は母さんが口を開いた。

「母さんはね、《大魔導士》や《レイヴィニア王国の魔術女王》、ひどいものには《歩く最終魔術兵器》なんてものもあるのよ。まったく、人を兵器呼ばわりするなんて、やんなっちゃうわ」

……「こつちもこつちでひどいな。女王とか最終魔術兵器とか。

俺が《戦略兵器級》と評したのもあながち間違いじゃない、ってことか。

でも、もしそれを口に出していたら

ツハ！恐怖のあまり、意識が飛んだぜ。

っていうか、よくよく考えると、父さんは母さんと喧嘩するたび、その魔術を食らっているのか。それで泥だらけになる程度とか、どいう体の作りをしてんだよ……。

「で、父さん母さんのレベルはいくつ？」

Sランカーならば、そのレベルも高いだろう、さて。

「父さんは80だ」

「私は78ね」

うわあ、ハンパじゃねえ。いったいどういう人生を歩んできたんだよ。

「他に聞きたいことは？」



「今のところは特に。今後聞くかもしれないけどね」

「そう、わかったわ。じゃあ」

「カイ、この後スキルを使って練習したいといっていたが、使うスキルはどうするんだ？お前には戦士の適正も、魔術師の適正もあるが、スキルスロットは10個しかないだろう」

あ、いうの忘れてた。

「実はね、両方の適正があるからか、スキルスロットも20個あるんだ」

「「はあ?!」「」

父さん母さんのシャウト。

「そ、それなら心配ないが……。カイ、他に隠していることはないか？」

む、無駄に鋭いな。うーん、言うべきかわわざるべきか……。でも、ずっと隠し通せるわけじゃないし、ずっと黙っててバレた後が怖いからな（特に母さんが）。

じゃあない、バラすか。

「実は、後2つあるんだ。1つは、1レベル上がるごとにステータスに振れるポイントが45あること。もう1つは、エクストラスキル《スキル合成》があることだよ」

なんか2人が石化した。

### 数分後

「まさかそんなことが……。カイ、このことは他の誰にも言うなよ、いいか絶対だぞ、絶対！」

父さんが興奮した様子で俺にそう言った。

なんかフラグっぽいこと言ってるし。父さん、それは言えといってるんですか、そうですか。

「もしこのことが世間にバレたら、カイくんはギルドにこき使われたり、研究者たちの実験動物になるかもね。それでもいいの？」

フラグがどうか言っでごめんなさい。絶対誰にも言いません。

「さて、驚きの連続だったが、話を戻そうか。カイは何の武器やスキルを使いたい？」

父さんの問いかけ。そりゃあもちろん

「双剣！！！！」

これ一択だろ。

「そ、双剣か……。使っている父さんがいうのもなんだが、双剣は

使いにくいぞ。父さんがSランカーとしてやっていけているのも、双剣を使いこなせる人間がほとんどいないからだ。それでもいいのか？」

あ、こつちでも双剣の鬼畜設定は活きているんだ。

「もちろん！」

俺は前世で使いこなしていましたが何か。

「ならいいんだ。双剣の使い方を一から十まで叩き込むから、覚悟しろよ？」

「う、うん……」

なぜだろう、今一瞬父さんの目に危険な光が……。気のせいかな？

「じゃあ、次は魔術ね。カイくん、どうしたい？」

どうしたいって言われてもな……。

「うーん、魔術についてはよくわからないんだよね。あ、でも回復魔術とか、強い攻撃魔術、補助魔術は欲しいな」

つまり全部。

「そうね……。じゃあ、最終的には母さんに近いスキル構成を目指す、ってことではどうかしら？」

おお、そりゃあいい。Sランカーの母さんと同じスキル……。やべえ、

興奮してきた。

「うん、そうするよ」

「わかったわ」

さて、最終的に俺の両親に対する尋問が、両親から俺への尋問へと変わってしまったが、そろそろ

「じゃあ父さん、今度こそ訓練しよう！」

「ああ、わかった。今行く」

ちなみに、昨日の父さん母さんの話し合い（主に肉体言語で）の結果、まずは剣技の基礎を定着させてから、魔術の訓練をすることになった。前世の経験があるぶん、すぐに魔術の訓練に入れるとは思うが。

「はやくしてよー！」

さあ、いよいよ訓練開始だ！

第7話 両親は……（後書き）

次こそ、いよいよ、待ちに待った、スキル発動です。でも、本格的な戦いはしばらく後です。

それと、私が個人的に出したかった人物が次は出ます。

よろしければ、評価、感想、ご指摘をお願いいたします。

第8話 特訓、そして (前書き)

どうも、遂にこの物語のキーパーソンの1人が登場します。

自分で書いてて悶絶しました(笑)この先が思いやられる……。

ではどうぞ、ご覧あれ〜。

## 第8話 特訓、そして

双剣スキル 《ツインストラッシュ》

俺の双剣が、父さんの体へと吸い込まれ

るはずもなく、容易く弾き返され、2本の木刀が俺の手から落ちた。

スキルは楽しいな。どうも、いつもよりテンションが高いなカイ・フォルティスだ。

俺と両親の暴露大会から、1ヶ月がたった。

俺はあの日からずっと、双剣やスキルを使った訓練を、父さんと毎日行っている。

久しぶりにスキルを使う爽快感は、やっぱり最高だ！

だがしかし、問題が1つ。

父さんスパルタ過ぎるんだよ！

どうやら1ヶ月前に父さんの目の中にギラついていた、あの危ない光は気のせいじゃなかったようだ。

そのスパルタ式特訓内容はというと、

「まずは5km走れ。戦士には体力が必要不可欠だ」

「よし、走り終わったな。では次は筋トレだ。まずは腕立て伏せを100回だ。そんな貧弱な腕で剣が振れるか！」

「休んでいる暇はないぞ。次はこの木刀（1本5kg×2）を持って構えてみる」

「そんな構え方ではダメだ！もっと腰を落として脇はしめる、そして足りない力は抜くんだ！」

「振り始めのスピードが遅い！もっとコンパクト、かつ正確に振れ！」

などといった、とても5歳児にやらせる訓練じゃない。

俺がなんとか今日まで生き延びられたのは、毎日運動や勉強をして、ステータスを上げてきたからだろう。



それがなかったら、初日で死んでいるところだった。たまに、お花畑も見えたし。

さて、その地獄をくぐり抜け、1ヶ月がたった今日、初めて実戦形式の訓練を行っている。

ようやく剣の基本的な振り方を覚え（といっても、父さん曰く、俺の習得の早さは異常らしいが）、スキルを使い、最低限の実力がついてきたから、このような訓練になった。

俺がさつき使ったスキル《ツインスラッシュ》は、双剣スキルの最も基本的なスキルだ。その攻撃回数は2回。隙が少なく、とても使いやすい。

しかし、超一流の双剣使いである父さんには、少しも当たる気がしない。完全にこちらの動きが読まれている。

しかも、父さんが武器として使っているのは《ただの木の棒》2本だ。

どうやらあんなものでも武器扱いにはなるらしく、木の棒でスキル《プロミネンス・ジャツジメント》を放っていた。

しかもドヤ顔で。シユールすぎてワロタ。

話を戻すが、父さんの動きは凄まじい。前世で最強レベルの双剣使いとしてならしていたが、そんな俺でも隙を見つけられない。

ダメ元で打ち込んだ結果、木刀を弾き返され、いとも簡単に敗北してしまった。

「カイ、大丈夫か？」

父さんが歩みよってくる。どうやらスパルタモードは解除されたようだ。

「うん、大丈夫。それにしても、やっぱり父さんは強いね。まったくかなわないや」

「そりゃあ、父さんは何十年間も双剣を振り続けてきたんだ。双剣を使って1ヶ月、しかも5歳のお前に負ける訳にはいかないな」

ははは、まったくだ。

「さて、そろそろ家の中に入ろう。今日は父さんの仲間がウチにやつてくるからな。1回風呂にでも入って、汗を落としておこうか」

そう、今日はどうやら父さんの冒険者仲間がウチに来るようだ。いままでは月に1回ほど手紙を出して連絡を取り合っていたようだ。何かの用があつて、ここ首都レイヴンにやつてくるらしい。父さんもその内容は知らないらしいが……？

そして、その人とは、父さんと母さんが大陸各地を冒険していたときに、一緒に旅をしていた人らしい。

そんな人ともなれば、かなりの実力者だろう。一体どんな人だろうか？

風呂に入って（この世界にも風呂はある。風呂大好きな俺にはありがたい）サツパリした俺は、両親と共にリビングでまったりしていた。

父さん母さんも、久しぶりにかつての仲間にあうということで、気分が高揚しているようだ。

俺と父さんが、双剣について話していると、呼び鈴が鳴った。どうやら待ち人が来たようだ。

父さんと母さんが玄関へ迎えに行ったので、俺もそれに続く。

そこに立っていたのは、父さんと母さんと同じくらいの年齢に見える、銀髪的美男だ。その後ろには、これまた銀髪的美女と、………  
…俺と同じくらいの子どもがいるが、母親の陰に隠れてよく見えな  
い。チラチラと隙間から見えるのは長い銀髪だ。女の子だろうか？

「やあ、アラン。久しぶりだな」

「そうだな、レイ。カイが生まれる2年前にお前と別れたから、7年ぶりか？」

あの男性はレイさんというのか。父さんと同じくらいのイケメンだが、俺の周りには美男美女しかないのか？

「ああ、そうだな。本当に、また会えて嬉しいよ。ところで、カイくんは？」

「そうだな、おゝい、カイ。ちょっとこっちにこい。」

なんだ、いきなり呼ばれたが。

「よし、レイ。紹介しよう。俺の息子のカイだ。」

カイ、こいつはレイモンド・メイビス。俺の旧友で、幼なじみだ。挨拶しておけ」

レイというのはあだ名だったらしい。さて、考えるのは後にして、挨拶しておくか。

「はじめまして、カイ・フォルティスです。レイモンドさん。よろしく願います」

「おお、はじめまして。俺のことはレイと呼んでくれ。君のことはアランからの手紙で聞いているよ。何でも、その歳で双剣の訓練をしているそうじゃないか。大変だろう、アランがコーチなんかをや

っている」と

大変なんてモンじゃない。何度死にかけたことか……。

「はっはっは、バカ言え。俺がそんなに厳しいはずがないだろう」

え、父さん。自覚なかったの？

「まったく、お前は昔から変わらないな。戦いのことになると、人が変わったようになる。そしてその自覚がないときだ。だから《肉塊生産工場》なんて珍妙な2つ名をつけられるんだぞ」

やっぱりそうだったのか。っていうか、その2つ名、本当だったんだ。

「まあ、いいじゃないか」

あ、父さん話を逸らした。

「で、お前の後ろにいるのが、お前の嫁さんと娘さんか？」

「ああ、そうだ。お前たちと別れたから後に結婚して娘が生まれたから、お前に会わせるのは初めてだな」

すると、今までレイさんの後ろで穏やかに微笑んでいた美女が口を開いた。

「はじめまして、アランさん、ミアさん、カイくん。レイの妻でエリスといえます。夫がお世話になったようです」

「いえいえ、こちらこそ。レイさんにはよくしてもらって、こちらの方が迷惑をかけてばかりでした」

今度は母さんが答えた。冒険者の妻同士、なんとなく気が合いそうなんだろう。

「これからもよろしくお願いしますね。さあ、アリア。あなたもご挨拶なさい」

「うん……」

おや、今までエリスさんの陰に隠れて見えなかった少女が、初めてその姿をはつきりと現した。

レイさんとエリスさん譲りの綺麗な銀髪に、人形のように整った顔、その瞳は深い海のような碧眼だ。腰までありそうな銀髪を高い位置でのツインテールにしてまとめている。

やっべえ、美少女（美少女？）じゃん。しかも、俺前世ではツインテテ大好きだったんだよね。

「は、はじめまして、アリアです……。よろしくおねがいますう  
……」

か、かわいい……。舌足らずな話し方がなんとも……！

っは、いや違うんだ。俺はロリコンじゃない。精神年齢は25歳だが、肉体年齢は5歳なんだ。そう、肉体年齢だけで言えば、俺は健全だ。断じてロリコンなんて変態性をもっているわけじゃない。もし変態だとしても、変態という名の以下略。

「まったく、アリアは恥ずかしがり屋だな。カイくん、この子は君と同じ5歳だ。仲良くしてやってくれ」

俺がそんなことを考えて悶々としていると、レイさんが俺にそう言うってきた。おっと、こんな変態じみた思考を続けている場合じゃない。

「よろしくね、アリアちゃん」

俺は、前世でも現世でも誰にも見せたことがなかった、爽やかな笑みを浮かべながら、そう言った。

「こちらこそよろしくねえ、カイ……くん？」

なぜか少し顔を赤くしながら、アリアちゃんがそう返してきた。

それにしても、最後の「カイ……くん？」という疑問形……。心当たりがありすぎる。

なぜならば、今まで目を逸らし続けてきたが、俺はどちらかという<sup>と</sup>と女顔なのだ。父さん母さん譲りの黒髪に金の瞳、線の細い顔をしている。

どちらかという<sup>と</sup>、という程度であってそこまでひどくはないが、今までに街の人たちに、

「あらうカイくん、今日も可愛いわね」 「カイくん、今日もいい美少じよ……じゃない、いい美少年っぶりだね」 「カイくん！いえ、カイちゃん！このドレス着てハアハア！」  
などと言われてきたのだ。

ちなみに、最後のは俺が服をよく買いに行く店の女店主の発言だ。あの時は本当に怖かった。目は血走っていたし、息は荒かったし……。ドレスを両手に持って、こちらへ走ってくる様は、まるでモンスターのようなだった。でも、服の品揃えは良いから、結局あそこへ行くことになるんだよね……。

まあ、それは父さん母さんのように顔が整っている、とも言えるし。今後に期待しよう。

「さて、お互いの紹介も済んだことだし、そろそろウチの中に入ってくれ。リビングでゆっくり話をしよう」

「ああ、そうさせてもらおう」

そうして、父さんがレイさん一家を引き連れて家の中へ。俺も早く行く



「さて、ではそろそろ本題に入るつか」

ソファーに座ったレイさんが口を開いた。

「アランやミアにも伝えていなかったが、アリアが先週5歳になったから、そろそろどこかに定住しようと思っていたんだ。今まではいろんなところへ旅をして、1ヶ所にとどまっただとしても、最長で1年くらいだったからな。それではアリアが成長する上で良くないと思っただ。それで、今日はこの首都への引越しの挨拶に来た、という訳だ」

「おお、そうなのか！で、どこに新居を構えるんだ？」

「この家の向かい」

「は……？！」

「ふふふ、どうだ、驚いたろう。お前のその顔が見たくて今まで黙っていたのさ」

ああ、どうりで最近、俺の家の向かいに新しい家が建てられていたわけだ。

それにしても、レイさん。その発想ガキすぎます……。父さんを驚かせたいが為だけにそんなことをするなんて……。

「ま、まあそれには驚いたが、他にも用事はあるんだろう？お前の様子を見ればわかる」

「おお、鋭いな。実は、ミアにアリアの事をお願いがあるんだ」

「私に？なんでも言っ頂戴」

「助かる。先日 of 適性検査で、アリア of 適正が《魔術師》だとわかってな。そこで、お前にアリアに魔術を教えてやって欲しいんだ。レイヴィニア王国最強 of 魔術師たるお前に教えてもらえれば、これ以上 of ことはない」

「なんだ、そんなことぐらいなら、もちろんいいわよ。でも、アリアちゃんはそれでもいいの？」

「うん。わたし将来お父さんみたいな冒険者になりたいから……」

おや、どうやら冒険者志望らしい。俺と同じだな。

「わかったわ。アリアちゃんに出来るだけ私 of 技術を教えてあげるわ」

「ありがとうございます！」

ああ、アリアちゃん of 笑った顔を初めて見たが、可愛いなあ……。

「じゃあ、そろそろカイくんに魔術を教えようと思っているから、そのとき一緒に始めましょうか」

あれ、母さん。それ言っちゃっていいの？

「うん？どづいつことだ？カイくん of 適正は《戦士》じゃないのか？」

やっぱり喰いついてきたよ。どうすんだよ、母さん。

「実はね、カイくんには戦士と魔術師の両方の適正があるの。だから、アランが剣術を、私が魔術を教えているの」

瞬間、レイさんとエリスさんが固まった。アリアちゃんはその異常さが分かっていないらしく、目をキラキラさせながらこっちを見ているが。やめろよ、照れるじゃないか。

数分後、石化状態から回復したレイさんたちに、父さんが説明を始めた。

俺はSランカーの戦士と魔術師の息子だから、その両方が遺伝して、なんとかかんとか

まあ、実態はチートなんだけどね。そんなこと言っても意味が分からないだろうが。

「まさかそんなことが……。しかし、昔から規格外だったお前ら2人の子どもだ。そんなことが起こってもおかしくはない、か」

レイさんが納得したような顔で頷く。違うけどね。しかし、父さんは釘を刺すのを忘れない。

「いいか、このことはここにいる者だけの秘密だぞ。そんなことが世間に知られたら、カイがどうなるかわかったもんじゃない。もし

お前がバラしたら、俺がお前のことを物理的にバラすからな」

「お前がやると言ったら本当に殺るからな、洒落にならん。まあ、わかった。エリスもアリアもいいいな？」

「ええ、わかったわ」

「うん、わかった」

順にレイさん、エリスさん、アリアちゃんだ。

良かった、これで俺の人権が守られる。それにしても、父さん。その脅し方は本当に洒落になりません……。

「さて、そろそろお暇しようか。荷物の整理もしなければならぬしな。片付いたら、ぜひ俺たちの家に来てくれよ」

その後、雑談を交わしていたが、日が傾いてくると、レイさんが立ち上がりそう言った。

「ああ、わかった。手伝えることがあったらなんでも言ってくれ」

父さんがそれに答える。

「それじゃあな。あ、そうだ、カイくん」

なんだ、どうしたんだ？ レイさんが俺に耳打ちする。

「アリアと仲良くしてやってくれ。あの子は長い引越し生活のせいで、なかなか同じ年の子どもたちと仲良くなれなくてな。よろしく頼む」

「もちろんです」

レイさんは俺の返答に満足したようで、エリスさんとアリアちゃんを連れて帰ろうとした。

が、なぜかアリアちゃんがじっとこっちをみている。どうしたんだ？すると、アリアちゃんがこっちにやってきた。

「また、ね。カイくん」

またアリアちゃんが顔を赤くしながらそういった（なぜだ？）。

しかし、何この可愛い生き物。お持ち帰りして……なんでもないです。

「うん、またね」

俺は平静を装ってそう返した。すると、笑いながらレイさんたちの方へと駆けていった。

……やっぱり今からでもお持ち帰りしよっかな？

第8話 特訓、そして (後書き)

はい、遂にヒロイン登場！ハーレムにする予定は今のところありません。

ちなみに作者はロリコンではありません。ケツシテソウジャナイヨ？

よろしければ、評価・感想・ご指摘などをお願いいたします。

## 第9話 魔術（前書き）

題名の通りです。

少しの間、説明的な文章が多くなってしまっつかも？ しかし、それを越えれば第1章の山場が来る……はず。



## 第9話 魔術

レイさん一家との初対面から半年がたった。

あの日から、俺とアリア（会ってから1週間後、ちゃん付けしていたら、呼び捨てにしようと言われた）の魔術の訓練が始まった。1日ごとに剣術と魔術の訓練を続けている。

そして、今日は母さんとの魔術の訓練。ここは俺の家の庭で、アリアが俺の隣に立っている。

「今日は水属性攻撃魔術の訓練をしましょう」

母さんがそう言った。

「水属性の魔術はね、他の属性の魔術に比べて、扱いが難しいの。動きも操作しにくいし、何より形を保つのに精神力を必要とするわ」

俺は前世で魔術をロクに使ったことがなかったから知らなかったが、スキルを発動するだけで、魔術が使えるわけではない。

まず、スキルを発動すると、自分の周りに《マナ》が集まってくる。マナとは、この世界に満ちている属性を持った目に見えない力だ。

それに魔力（MPのこと。流し込む魔力量で威力は変化する）を流し込み、魔術を発動させる。

しかし、それだけで終わりではなく、それを固定化・操作するのに精神力を費やす。

例えば、火属性攻撃魔術 《ファイアボール》ならば火の玉を、風属性攻撃魔術 《ウィンドカッター》ならば風の刃をはっきりとイメージしなければならぬ。これが《固定化》だ。これが上手くできないと、ゆがんだ小さな火の玉や、ただの強い風になってしまい、失敗してしまう。

そして《操作》はその名の通り、魔術を操作することだ。魔術は、その一つ一つに操作できる範囲・動かし方がある。例の 《ファイアボール》ならば、その範囲は術者の半径20メートル、動かし方は直進のみだ。

そうすることにより初めて《魔術を使う》ことになるのだ。

母さんが「水属性の魔術は扱いが難しい」といった理由は、その固定化のイメージがつかみにくく、また、操作も変則的だからだ。

「じゃあ、まずは基本の 《ウォーターアロー》ね。やってみて」

《ウォーターアロー》。水属性攻撃魔術で最も簡単な魔術。そのイメージは名前の通り、水の矢。操作範囲は半径25メートル、動かし方は直進・曲進。

俺とアリアが同時に唱える。

「スキル 《ウォーターアロー》」

すると、俺たちの周りに水属性のManaが集まってくる感覚が。そこに最低限の魔力を流し込む。

そして、イメージするのは水の矢だ。

次の瞬間、俺とアリアの目の前に、水の矢が現れる。今のところ、一応固定化は成功したようだ。

だがしかし、気は抜けない。一度固定化に成功しても、その後も集中しなければ、すぐに霧散してしまう。

「うーん、まだまだ固定化は甘いわね。少しするとすぐにブレてくる。特にカイくん。固定化が雑すぎるわ。もっと丁寧に」

くそ、なかなか上手くはいかないな。ちなみに、母さんならばこのウォーターアローを一瞬で、軽く1000発は発動できる。空中に1000本の水の矢が展開されたときには、その光景に俺とアリアは絶句してしまった。

「まあいいわ。とりあえず的に向かって撃ってみなさい」

俺とアリアはその的

《スライムゴーレム》へ目を向けた。

スライムゴーレムって、スライムなの？ゴーレムなの？ と思うかもしれないが、その両方の特性を兼ね備えていて、分類上はゴーレムだ。スライムのような半透明のプルプルしたボディで、見た目は人型。

母さん曰く、

「スライムゴーレムは攻撃力は低いけど、盾としては優秀なのよ。基本的にはどんな衝撃も吸収するし、もし破損してもすぐにくつつくし」

ということだ。たしかに、いままでずっと魔術を打ち込んできたが、プルプルするだけで全く効果がない。

かなりハイレベルの水属性ゴーレムらしいが、母さんはそれを俺たちの練習用的として召喚している。一般の魔術師が見たら啞然とするだろう。

魔術の発射のため、スライムゴーレムの方を向く。

そして、俺とアリアは同時にウォーターアローを放つ。俺の軌道は直線、アリアの軌道は曲線を描いて飛んでいく。

数秒後、着弾。しかし、スライムゴーレムはプルプルするだけ。

「まあ、初めにしては上出来ね。それじゃあ、もっと細かく説明するわね」

そうして、日が暮れる頃、なんとかウオーターアローの使い方を習得した。

「じゃあ、今日の訓練はこれでおしまいね」

「「ありがとうございますー！」」

今日の訓練が終わる。アリアが俺に話しかけてきた。

「カイくん、おつかれ〜」

「うん、おつかれ」

アリアは初めて会ったときは恥ずかしがっていたようだが、今はもう慣れたようで、元気に俺に話しかけてくる。

「今日の訓練は大変だったね〜」

「そうだね、どうにも水属性の魔術はコツがつかめない。なのにアリアはすごいね。僕よりも何倍も早くコツをつかんだんだから」

そう、アリアは魔術を使うのが上手い。今日俺はウオーターアロー1発を固定化するので精一杯だったのに、アリアはもう既に、5発分固定化できるようになっていた。どうやら魔術において、アリアにはかなわないようだ。

「えへへ、そう？ 嬉しいな」

アリアがニコニコと笑う。あーかわいいなー。

「カイくん、アリアちゃん、お疲れ様。はい、これ。のどが渴いたでしょ？」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます、カイくんのお母さん」

母さんが水を持ってきてくれた。ありがたい、のどがカラッカラだったんだ。

あー、うめえ。生き返る〜。

「それじゃあ、カイくんはアリアちゃんを送って行ってあげてね。すぐ近くだから、心配ないと思うけど」

すぐ近くも何も、向かいの家だけだな。ま、行くけどさ。

「じゃあ、アリア。行こうか」

「さっ」

そうして俺とアリアは歩き出す。

談笑していると、すぐにアリアの家に着いた。

「それじゃあまたね、カイくん」

「うん、また」

アリアが俺に手を振りながら、家の中へと入っていった。

さて、俺も帰ってゆっくりするか。

## 第9話 魔術（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

よろしければ、評価・感想・ご指摘を。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6541x/>

---

Unlimited World Online

2011年10月21日00時04分発行